



おやきの具材などに使われ、丸い姿が印象的な丸ナス。北信ではおなじみの野菜ですが、近年は生産者の高齢化もあって一般的な長ナスに比べ存在感が薄いのが実情です。生産現場を訪ねました。

調理向き 欠かせぬ存在

北信各地で栽培

長野市街地の東部で、住宅地や工場、農地が混在する北長池。原田直一さんは水田から転作した畑でキュウリやマクワウリ、スイカなどとともに丸ナスを栽培しています。

「昔は500〜800本ぐらの丸ナスを作っていたんですが、今は200本。年には勝てなくてね」と、81歳になる原田さん。「丸ナスは歯応えがあつてうまいんだけど、若い人はあまり食べないから」。今年は長ナスも100本手掛けています。

「ナスは黒くない」と、丸ナスでも黒光りする実が特徴的な太助丸という品種を手掛けるのが原田さんのこだわり。JAなの直売所に出すほか、求めに応じて地元のおやき店に卸しています。

芳川智恵社長は「ナスはおやきの具材として人気は高いのですが、最近が高くてね」と頭を痛めている様子。おやきでは輪切りのほか刻んで入れる方法もありますが、その場合でも身が縮まった丸ナスは欠かせません。一般的な長ナスは水分が多く使いつらいのです。地元産で賄えない分は

県外、群馬や高知から仕入れられているそうです。個々の農家が、それぞれに直売所などにしている中で、JAとして丸ナスを市場出荷しているのがJA中野市です。ホームページでは「皮が厚く熱を加えても煮崩れせず、調理に適したナス」と紹介しています。同JA園芸課によると出荷量は年間50tほど。反収で見ると長ナスより有利なことが

加工に活路



おやきの具材や漬物に…



「よいしょ」と腰をかがめて丸ナスを収穫する原田直一さん

定年帰農者が契約栽培

長野市松代

「年金プラス（農業収入で100万円）を合言葉に定年帰農者を集め2008年に設立しました。主導した同組合の半田孝一参事はJA全農長野出身。退職後、地区のお年寄りに「このままでは農業の農業は終わってしまう。地区の農業振興をせよ」と訴えられ、（組合を）つくった」と振り返ります。

「市場出荷だと大きさや姿形を含めた品質管理が厳しく、農家出身とはいえ定年退職者にはハードルが高い。加工用なら多少の傷は問題ない」と説明。「幸い全農時代に付き合っていた会社から『全部受ける』と言ってもらえました。販売先に困ることはありません。農家出身の定年退職者に声を掛け、組合として出荷を始めました」

現在メンバーは24人。うち12人が丸ナスを手掛けています。いずれも水田だった畑で栽培しており、品質と収穫量が安定していることが自慢です。今年の作付けは3750本。全量加工用の契約栽培です。出荷先は当初は地元のお

やきや漬物メーカーが中心でしたが、現在は総菜用を使うコンビニチエーンが最大の顧客に。先月は、そのコンビニチエーン店の指導に当たる経営相談員らの勉強会で、ふかしナスなど丸ナスを使った地元の料理を振る舞いつつ、生産現場を案内しました。

担当者は「地元の食材を利用した総菜は、味や品質で安心感があり、消費者の反応もいい。地域との連携を意識した取り組みは本部の方針でもあり、この取り組みが地区を盛り上げる一助になればうれし

い」と勇気づけられる一言。それでも、小林正男組合長をはじめ組合幹部は楽観していません。「生産者の負担を可能な限り抑えた出荷態勢を取っているのですが、メンバーが増えませんか」と口々に訴えます。

「今年は65歳で入ったメンバーが1人。農業大学出身で昨年加わった30代の女性を唯一の例外として、残りのメンバーはいずれも70〜90代。先が見通せません」

「伝統野菜も丸ナス」北信地方では地場のナスも丸ナスが中心です。長野県が選定する「信州の伝統野菜」のナスのうち、北信には現在、小布施町の「小布施丸ナス」と、長野市南部と千曲市の一部で栽培されている「小森茄子」があり、いずれも丸ナスです。小布施丸ナスは、小布施町の保存会に対し「伝承地栽培認定」もしています。小森茄子に対しても認定の作業が進んでいます。た

高校生も振興に一役

だし、いずれも現代の栽培品種と違い収量が低く、栽培に気を遣う点が多いなど課題が残ることは事実。小森茄子は、地元の更科農業高校や県などが2022年から再興を図るプロジェクトを始め、生徒が苗を育て、希望する農家に提供するなど重要な役割を果たしています。小布施丸ナスでも今年、町役場が須坂創成高校（須坂市）農業科の生徒に苗を配り、栽培を経験してもらっています。

定年帰農者を集めて奮闘する農業野菜生産組合の幹部ら（左から参事・半田孝一さん、副組合長・村松幸治さん、組合長・小林正男さんと、JAグリーン長野の窓口となっている松代東店の店長・大島繁彦さん）



私たちの国で消費するたべものはできるだけこの国で生産する国産消費国産にJAGグループは取り組んでいます



食と農で地域に笑顔をつくります

次代につなげる農業・組織・経営基盤の確立

おはようございます

JA信州うえだ 西部地区事業部 普及推進課 中澤 裕貴



JA共済の強みは入院・手術の際や災害時の迅速な対応です。お客さまにいち早く安心していただくために、私自身も請求手続きを丁寧に行うよう日頃より心がけています。これからも組合員・地域の皆さまに、JA共済を今まで以上に身近なものとして感じていただけるよう、しっかりとコミュニケーションを図り、信頼いただき、少しでもお役に立てるよう活動してまいります。

健康 Q & A

進歩する腎臓病治療

腎臓を保護する治療が進歩していると聞きます。どのようなものですか？

(55歳、男性)

腎臓は「沈黙の臓器」と呼ばれています。慢性腎臓病は進行性の疾患であり、一度進行し腎機能が低下してしまうと、元の状態に戻すことが難しいといわれています。また腎機能が低下すると、心臓病が起こりやすくなったり、入院・死亡のリスクが高まると報告されています。

これまで慢性腎臓病に対しては、生活習慣改善・食事療法・薬物治療が行われてきました。生活習慣改善・食事療法は、節酒・禁煙・減塩・体重コントロール・運動・規則正しい食生活を行うことです。薬物治療は、これまで慢性腎臓病の原因を治療するものや、貧血やむくみなどの症状を和らげるものが主流でした。原因治療薬としては、降圧薬・糖尿病薬・脂質代謝調整薬、症状を和らげる薬剤は、鉄剤・造血ホルモン剤・利尿剤・ミネラルバランスの調整剤でした。

近年は、慢性腎臓病そのものを治療する薬剤が登場しています。腎臓には血液中の老廃物をろ過して尿をつくる「糸球体」があり、慢性腎臓病は糸球体を構成する微小血管の障害で生じるといわれています。糸球体に流れ込む血流を整えるSGLT2阻害剤や、糸球体における炎症や線維化を抑えるミネラルコルチコイド受容体拮抗薬が出現し、糸球体を保護することができるようになりました。尿たんぱくの減少や腎機能低下予防など、これまでにない治療効果が期待されています。

(JA長野厚生連長野松代総合病院 総合診療科統括部長 石津富久恵)

お知らせボード

★農業インターンシップ参加者募集

農業および農業を支える仕事に興味を持つ学生らを対象に、JAみなみ信州(飯田市、20~22日)、タローファーム(養豚、上松町、23~25日)、JA信州うえだ(上田市、9月11~13日)で実施。詳細は下のQRコードから。参加無料。現地までの交通費や宿泊費(2泊)は、県内企業への就業を支援する長野県の「NAGANOインターンシップ補助金」へ申請できます。◎JA長野中央会営農農政部内のJA長野県農業労働力支援センター ☎026・236・2019

